

幸福の赤いサクランボ



41歳、就農人生賭ける

農業の後継者不足が言われて久しいが、私にとって農家の跡取り

私は今年還暦を迎える。周囲の友人たちは「さて、定年でこれから何をしようか」と考えている。数年はゆとりくりするという人も少なくないが、最近、私に「農業でもやるか」と意気込んで声をかけてくる人も多い。

「やめた方がいいですよ」。私はそう言い、冗談交じりにこう続ける。「本格的に農業をやるなら相当な投資と、あらゆる分野の勉強をしないと採算はとれません。ましてや採算を度外視した趣味で、小遣い稼ぎの農業をやられたら、私たち農業者が迷惑です」



問題はずっとトラウマだった。家は戦前からの自作農家。長男として生まれ、名前も「多くの田んぼを耕す太郎」。自分の名前を嫌悪の対象にした時期もあった。

私は幼稚園児のころから就農する直前まで農業がある種、おとしめられた身分制の中の職業のように思っていた。「発展性が見いだせず、暗く貧しく、労働の正当な対価が得られない最も魅力のない職業」と思い込んでいた。

高度経済成長期、日本中の専業農家の長男は、こうした思いを多かれ少なかれ持っていたのではないだろうか。そのころ私の周囲で

春になったら新たにサクランボの苗木を植える園地の前に立つ多田耕太郎さん 山辺町元宮

は、両親を始め多くの大人が「百姓だけでは食えない。もうひとつ別の職業を選択するべきだ」とことあるごとに口にしていた。

また「土に生き、地域に根ざした農業者」といわれる方々が顕彰されたり、モデルケースのようにマスコミに取り上げられたりしても、仕事としての農業に興味を持つことはなかった。

そんな私が、41歳の時に意識の転換を決意した。残り半分の人生をサクランボ栽培に賭けたい。「継続性のある、明るく楽しい、もうかる農業をしよう」と。

背中を押したのは、思春期に向かう2人の子供の存在だった。

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、1・7畝のサクランボ園を経営する。